

模擬株式会社 IMAKANE FACTORY

～「社会に開かれた教育課程」と「協同学習」の活用～

1 模擬株式会社設立の主旨

生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようになるためには、ほめられたり感謝されたりする機会を増やし、生徒の自己有能感が高まる場面設定が必要になる。そこで、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会として、校外での作業や現場実習を計画的に設定する必要がある。特に、校外で行う受注作業は、地域の関係機関の業務を補助する活動として、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることにより、関係機関の職員や町民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めると考えられる。

生徒は福祉的就労も含め、組織が目指す目標や収益の向上に向かって努力することが求められることから、収益を上げることを意識した学習活動の枠組みを設定することが重要になる。

卒業後の職業生活への円滑な移行を図るため、卒業後の職業生活に類似した環境として、全生徒が一人500円の出資金をPTAから受けて模擬株主及び社員となって、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」を設立しました。模擬株式会社では作業学習や受注作業、販売等について、「会社の仕事」として業務を行うとともに、仕入や商品管理、販売・会計のプロセスを体験する学習を行う。

2 模擬株式会社設立総会

平成29年6月7日（水）に、模擬株式会社設立総会が全校生徒参加の下、行われた。はじめに、総務部担当教員が生徒に株式会社設立の目的と定款、組織図、学習計画、予算などについて説明した。次いで、各学科の代表生徒がそれぞれの学科の特色や取り組みについて説明し、今年度の計画を決定した。



模擬株式会社設立総会



窯業科・産業科の取り組みの説明

3 模擬株式会社における窯業製品の生産の工夫～「協同学習」を活用して～

3年産業科では、総会後に改めて株式会社とはどのように成り立っているのか、仕事やお金はどのように生まれるのかを説明する授業を行い、それを実感できるよう、その後の作業学習では、作業の目的や作業グループ、作業担当者氏名や作業分担、作業の流れなどを示す「組織図」を用いて作業学習を進めた。

(1) キーマカレー用の楕円皿の受注と生産

NHK室蘭放送局内のカフェから、キーマカレーやホットサンド用の楕円皿の製作を受注した。カフェの運営を委託された鶴羽佳子氏（北海道教育委員会教育委員）が、キーマカレーなどのプロデュースを料理家の黄川田としえ氏に依頼し、使用する皿も探すことになった。黄川田氏が打合せの際に、鶴羽氏が持っていた本校生徒の作品の方がいいという結論になり、受注が実現した。

本校では、平成27年度から「アクティブ・ラーニング」の一つである「協同学習」について全校研究で取り組んでおり、普段の作業学習の授業においても「協同学習」の方法で話し合い、課題

解決する授業を展開している。

今回の受注生産でも、受注品の生産方法を話し合っ、「組織図」を活用してお皿の担当や商品チェック係を決めたり、報告する際の連絡系統を話し合っ決めてりしながら製品生産を進めた。生産に当たっては、カフェから提示いただいた料理の盛り付け写真を参考にしながら、次の点に注意を払っ試作を繰り返した。

- ① 楕円皿の用途を考え、お客様が望んでるお皿の形になるように、粘土の厚さと形がきれいになるための乾燥の方法について条件を変えて試作しました。
- ② 製品を製作する日が変わっても一定の品質を保つために、各製品を作るに当たっ必要な知識を確実に学ぶことや複数のチェック係による検品、作った全ての製品の数と納品できる数などを把握するための商品管理を行いました。

その結果、「お客様に満足していただける商品」を全員が意識しながら各担当が責任を持ち、確実な仕事をする事ができた。また、よりよい仕事をするためにPDCAサイクルで作業を進めることの大切さを生徒に実感させながら授業を進める事ができた。



製作した楕円皿

(2) 飲食店用の大皿の受注と生産

2回目の受注作業として、町内にある飲食店やその関係店（札幌市内）から大皿の製作を受注した。「組織図」を利用して、各生徒の仕事の分担を明確にするとともに、1回目の受注品を納品するまでの過程でよかった点や改善点を話し合っ結果に基づいて、人数配置の改善をしたり、製品の精度を上げるためにダブルチェックできる体制にしたりするなどの改善を行っ、受注品の製作に取り組んだ。

「組織図」は、作業の目的や作業グループ、作業担当者氏名や作業分担、作業の流れなどを分かりやすく示した構造図である。例えば、生徒を「釉薬がけ」担当者と「修正」担当者に分けて、前者は「組織図」の上方に、後者は下方に氏名札を配置し、作業分担と担当者氏名、作業の流れなどが分かるように、項目と項目を線で結ぶ。

この「組織図」を示して作業の目的や流れの理解を促し、生徒全員が「お客様に満足してもらえる製品を作る。」という共通の目的のために作業に参加し、お客様を想像しながら、社会の中で働くという意識を持てるようにしている。

作業学習では、「協同学習」の考え方で授業を展開し、「個々に与えられた責任を果たすことで全体の仕事が成り立っていること」、「自分の仕事が終わったとしても、全体の目標が達成されていなければ仕事は完成していないからこそ、周りのために動かなければいけない。」という協働の考え方が身につくように取り組みを進めた。



製作した大皿

4 模擬株式会社における窯業製品の生産の成果

よりよい製品を生産することができる「よい仕事」をするために、PDCAサイクルを生徒に実感させながら授業を進めることができた。

成果としては、次の点が挙げられる。

(1) 生徒の生産に対する考え方の変容

「自分の目標の達成や成長のために努力した結果、お客様のためになる。」という考え方から、「お客様のことを考えた上で、組織の中で自分はどのような役割を担わなければいけないのか。」という考え方に変化してきた。

(2) 正確でより深い知識や技術の習得意欲の向上

今までに比べ、知識や技術を習得しようという意識が高まり、自分が得た知識を作業ノートにまとめ直したり、授業以外の時間に技術面のアドバイスを教師に聞きに行ったりする場面が多く見られるようになった。

(3) 障がいの自己理解と長所を生かした責任ある業務遂行の意識化・行動化

「組織図」や「〇〇担当」など、自分の働きが会社にどのように貢献できるかを実感できるようになってきたことにより、「自分の障がい特性を理解して、手立てを考えること」や、「長所をどのように生かすか」など、責任を持って取り組むために自分ができることを試行錯誤するようになってきた。

(4) チームとしての人間関係の深まり

学科の一員という意識から、「自分は会社の一員である。」という考え方ができるようになってきたことにより、学級の仲間意識が強くなり、「チームで仕事をする。」「チームで活動する。」というチームワークの意識が高まってきた。

今後も、卒業後が本番ではなく、「既に社会人である。」という意識を持ち、成長に向けて毎日を過ごすことができるよう、指導者としても試行錯誤していきたい。

(3年産業科担任 鐘ヶ江 真知)

実践事例 2

外部の専門家と連携した製品開発

1 外部の専門家と連携した製品開発の主旨

窯業科では、同じ規格の製品を正確に数多く生産することができる作業能力の育成を目指し、釉薬を製品全体にかける方法を基本として製品を生産してきた。しかし、課題としては、一人一人の生徒の個性が活かされた製品生産ができないことや消費者のニーズに応えられる製品の種類の拡充が課題となっていた。

そこで、平成28年度から作業学習において、地域の陶芸作家による絵付け技法を導入し、年3回程度学年ごとに直接指導を受けながら、消費者ニーズに沿った新製品を開発する作業学習を行った。

2 障がい者アートとしての製品作り（平成28年度）

函館市在住の陶芸作家である石川久美子氏（本校学校評議員〔平成29年度～〕）を講師として、指導を受けながら新製品の開発を行った。

(1) 幼児向けの新製品開発の工夫

新製品開発のターゲットを幼い子どもに合わせ、幼児に好まれる絵柄を陶芸用クレヨンを用いた絵付け技法を用いて、製品に絵付けを行った。



絵付け作業



ドリヤ皿

(2) 幼児向けの新製品開発の成果と課題

① 成果

- 学校祭の販売会では、動物の絵柄を絵付けしたドリヤ皿が一番早く完売し、幼い子供のいる主婦の方々やお孫さんに買い求める年配の方々から好評をいただいた。その他にも、約10種類の製品を出品したが、短時間で完売した。
- 消費者のニーズを考えて、どのような製品が売れるのか考えて、絵柄と絵付けの方法を工夫した結果、学校祭の販売会ではお客様から好評をいただき、短時間で完売したことにより、生徒の達成感や自己有能感が高まった。
- 使う人の使い勝手や好まれる絵柄を考え、絵付けの方法を工夫することにより、消費者が求める内容に気づき、ニーズに応えられるよう作業に集中して取り組むことができるようになった。



幼児向けの新製品

② 課題

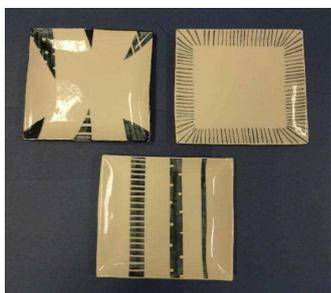
- ・陶芸用クレヨンを用いる絵付け技法では、生徒の実態によって絵付けが可能な生徒と難しい生徒がいるため、全員が製作に参加できない場合があった。
- ・絵柄に個性が出すぎてしまうため、会社としては可能な限り同じ製品を製作するという正確性を求める学習の場合にはそぐわないという課題があった。

3 流行を取り込んだ誰でもが生産できる新製品作り（平成29年度）

講師の石川久美子氏から、伝統的な顔料である「呉須」を使って、最近の流行となっているボーダーや三角の絵柄の絵付けの技法などを学び、新製品を開発した。

(1) 「呉須」を使ったボーダー柄等の絵付けを行う新製品開発の工夫

絵付けは前年度の反省を生かし、今年度は昨年度から引き続き指導いただいたマスキングテープを使った技法を用いて新製品を開発した。この技法を使うことで、どの生徒も製品作りに参加でき、生徒全員がある程度同じ製品を製作することができるようになった。また、陶芸品の最近の流行から売れ筋商品の絵柄や絵付け方法として、「呉須」を使ったボーダー柄等の絵付け方法を講師から学び、新製品の開発に取り組んだ。



ボーダー柄等の絵付けを行った新製品



講師による授業

(2) 「呉須」を使ったボーダー柄等の絵付けを行う新製品開発の成果と課題

① 成果

- ・どの生徒が作業を行っても、ある程度同じ絵柄の製品を製作することができるようになった。
- ・作業工程の内容から分業制で生産することが可能であり、「協同学習」の方法を用いて、1枚の皿の作業工程の内容をどのようにするか話し合った。その結果、生徒は3人程度のチームで協力して完成させる作業工程を作成した。具体的には、「同じチーム内でも細かな作業が難しい生徒はマスキングテープを貼る。」「細かな作業が得意な生徒は筆を使う。」「慣れてきたら役割を交代する。」などの分担と3人程度のチームで完成させる工程を考えた。
- ・全員が絵付け作業に参加し、自分の役割を持ち、協力し合うことで絵付けを完了することができた。
- ・講師の石川久美子氏との情報交換の中で、昨今の流行の情報を取り入れることができ、消費者ニーズに沿った新製品作りを行うことができた。
- ・講師が実際に目の前で絵付けをしていく様子や、完成した皿を見た生徒からは「格好いい！すごい！」という驚きの声が上がった。実際に目の前で完成していく様子を見ることで生徒の興味・関心を引き付け、自分たちも作ってみたいという気持ちを高めることができた。
- ・初めて呉須を使ったデザインに挑戦したことや、全員が製品作りに関わったことから、「焼き上がりを早く見たい。」と口々に話す生徒の様子から、強い期待感をもって新製品を開発することができた。
- ・学校見学に訪れた町内の方々から、「今までにない雰囲気の新製品である。」と驚きと期待の声が寄せられた。

② 課題

- ・陶芸作家の専門的な技術をどのように生徒の製作活動に反映させるかということが今後の課題となった。

- ・自分たちの作った製品がどのように社会につながっているのかを生徒が実感できる機会を意図的に数多く設定することが課題となった。

4 外部の専門家と連携した製品開発の意義

- (1) 外部の専門家と連携することにより、消費者のニーズを把握して、購入層を絞り込んだ新製品開発を行うことができた。
- (2) 陶芸品の流行に応じた専門的な釉薬や技法を習得することができた。
- (3) 生徒はどのような人に使ってほしいのかを想像して製品作りを行うとともに、直接販売を通してお客様の反応を実感することができ、「お客様に喜んでもらえる製品作りをしたい。」という学習活動に対する動機付けを高めることができた。
- (4) 生徒が自分たちの作った製品がどのような人の手に渡り、どのように使われていくのかについて知ることで、自分たちが社会の一員として働いているという実感をもつようになった。

11月に行われる学校祭での販売会で、お客様の反応を実際に体感することや製品の販売数から、生徒の学習の成果を振り返り、今後の学習につなげていきたいと考えている。

(3年産業科作業担当 亀田倫代)

実践事例 3

外部の機関と連携した商品開発

1 外部の機関と連携した商品開発の主旨

「社会に開かれた教育課程」としては、教科横断的な視点を持って育成を目指していくこと、地域と連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する活動を「地域学校協働活動」として推進することが重視されている。

そこで、本校では、学校所在地の今金町の地域特性を活用し、地域が抱える課題の解決に挑むとともに、地域の学校や人々との交流を通じて、地域創生の実践者であり、共生社会の担い手を育成することを目指している。

本校家庭総合科（1年生）は、北海道八雲高等学校総合ビジネス科（3年生）と交流及び共同学習を通じて、「今金町の定番土産商品」となることを目指して、「ショコラクッキー」を開発した。この取り組みは今金町内の社会福祉法人光の里の「多機能型事業所ワークショップいまかね」と連携した取り組みであり、「高等学校・高等養護学校・社会福祉法人」との連携・協働による商品開発である。

2 社会福祉法人と連携した商品開発（平成28年度）

本校の創立20周年記念事業のうち、本校生徒会の取り組みの一つとして、「記念菓子」を開発して、創立20周年記念式典で配付することとした。開発に当たっては、多機能型事業所ワークショップいまかねと連携し、将来的には「今金町の定番土産商品」となることを目指し、「記念菓子 ショコラクッキー」を開発した。

(1) ショコラクッキー開発の工夫

生徒会執行部の生徒が、夏季休業期間中にクッキーの形や味のイメージ、そして、型抜きによるのか、手作り感のある方がよいのか、色鉛筆で彩色したイメージ画を複数考案した。ワークショップいまかねが、生徒の考案した複数の案に基づいて、複数の候補を製作し、生徒が試食して最終的なプランを決定しました。

デザインは円形にハート型が入るデザインとし、味はホワイトチョコレート×イチゴ（ハート部分）の1種類とした。商品名は「清流の薫り」とし、パッケージデザインは仮のデザインを作成した。

完成したショコラクッキーは、創立20周年記念式典で記念品として配布された。その後は、本校の学校祭で販売して完売した。また、平成29年2月に今金町で行われた第36回北海道障害者冬季スポーツ大会では、選手や参加スタッフに記念品として配付された。



ショコラクッキー「清流の香り」

(2) ショコラクッキー開発の成果と課題

① 成果

- ・生徒会執行部の生徒が考案したクッキーが、創立20周年記念式典や学校祭、第36回北海道障害者冬季スポーツ大会で配付・販売され、好評を得たことにより、生徒は地域を意識した商品開発に手応えとやりがいを感じる事ができた。
- ・創立20周年を記念する生徒の主体的な活動を記念すべき年度に展開することができた。

- ・本校の教育活動や生徒への地域の理解・啓発を図ることができた。
- ・今金町の定番土産となることを目指した商品化への第一歩となる商品開発を行うことができ、関係機関との連携・協働がスムーズに行われるようになった。

② 課題

- ・一般商品として販売する上では、味の甘さが人によって評価が分かれるため、購入層を想定した商品の質の向上が課題となった。
- ・幅広い世代に好まれる味作りのため、同年代の高校生と協力して幅広い視点から商品開発を行うことが必要となった。
- ・商品パッケージが仮のパッケージのため、購入層が手に取りやすい商品パッケージを考案する必要があった。
- ・創立20周年記念事業における生徒会の取り組みとして開発したため、今後は商業科のマーケティングの基礎として指導を段階的に行う必要があった。

3 高等学校と連携した商品開発（平成29年度）

商品開発と販売に実績があり、隣町に所在する北海道八雲高等学校総合ビジネス科と交流及び共同学習を通じて、新しいショコラクッキー「チョコっと ひといき。」を開発した。

(1) 新しいショコラクッキー「チョコっと ひといき。」開発の工夫

① 商品開発の方向性の決定

5月に製造を担当するワークショップいまかねとの打合せを行い、北海道八雲高等学校総合ビジネス科と連携しながら、次の方向で商品開発をしていくことを決定した。

- ① 味も新しくする。
- ② 商品名も「清流の薫り」から、味を変えることに合わせて新しくする。
- ③ パッケージデザインも考案する。

次いで、5月に北海道八雲高等学校総合ビジネス科との打合せを行いました。

- ① ワークショップいまかねと確認した3項目で商品開発する。
- ② 両校がそれぞれにアイデアを考え提案し合い、最終案をワークショップいまかねへ提案する。
- ③ 両校生徒が交流及び共同学習を行い、意見交換できる場を設ける。

併せて、今後の方向性として、次の3点も確認されました。

- ① 北海道八雲高等学校でも、北海道高等学校長協会商業部会が主催する「北海道高等学校商業教育フェア」（以下、「商フェア」という。）等で販売する。
- ② 両校の名前をパッケージに入れる。
- ③ 北海道八雲高等学校では、総合ビジネス科の3年生の「総合実践」の授業で交流及び共同学習を実施する。

② 商業科のマーケティングの基礎に基づいた商品開発

1年家庭総合科の作業学習の食品加工の題材として、4月から商品開発を開始した。総合ビジネス科と共同開発するということもあり、商業科のマーケティングの基礎を生徒の実態に合わせた形で指導しながら、商品開発を進めた。

これらの検討は、教師がテーマを提示し、生徒がそれぞれ案を考えて持ち寄り、作業学習の時間に「協同学習」を活用して、生徒が話し合いを行い、案を練った。生徒の話し合いでは、「商品企画会議」という会議名をつけ、話し合いのルールを「1 明るく 2 笑顔で 3 ブレインスト

ーミング」の3点に設定した。

これらを守って活発に議論するよう生徒を促した。話し合いが進むと言葉がきつくなる場面もみられたが、生徒は「アイデアを考えるのは難しいけど、またやりたい。」「話し合いをしていると、笑顔がなくなってしまうので気をつけたい。」などの感想を話しながら、前向きに取り組んだ。

ア 購入対象となる消費者層（ターゲット）の検討

はじめに、購入対象となる消費者層を検討しました。販売場所は本校学校祭と商フェアの2箇所として大別した。

- 学 校 祭：女性35歳から49歳（F2）
- 商フェア：女性20歳から34歳（F1）

これは、縫工製品の製作に向けて生徒が行っていた市場調査のデータを生かしたものである。家庭総合科の1年生8名が、5月に学校や寄宿舎で上級生や寄宿舎指導員から学校祭の様子を聞き、来校者は主に保護者と先輩たちということを確認することができた。そのデータから、ショコラクッキーに興味を抱いてくれる人を選定した。商フェアは、新さっぽろサンピアザ（札幌市）で行うため、そのショッピングセンターを良く知る教員を対象として、来店者の客層を調査した。本校生徒はコミュニケーションを課題とする生徒が多いため、上級生や大人に話を聞くこと自体に大きなハードルがあった。そこで、各々が話しやすい相手を探し、情報を入手するとともに、情報の取捨選択も行うことができた。

イ 味の組み合わせの検討

次に、味の組み合わせを検討しました。使用可能なチョコレートは「①ホワイト ②イチゴ ③抹茶 ④カカオ」の4種類があり、これをクッキー生地に合わせてショコラクッキーを作ることとした。味の組み合わせは、土産物店で販売されている類似商品を実際に食べ、おいしいと思うものを選び、「迷ったときには、ターゲットが好むものは何か？」という観点で最終案を決定した。最終案は、「①抹茶+ホワイト」、「②ホワイト+イチゴ」、「③ホワイト+カカオ（ビター）」の3種類となった。



試食・検討①



試食・検討②

ウ 商品名の検討

生徒それぞれが数点の案を出し、全34点の案を基に話し合いを行い、最終案を次の3点とした。

- ① しっとりチョコレートクッキー cho・co・ro
- ② チョコっと ひといき。
- ③ ひといき cho・co・ro

エ パッケージデザインの検討

商品名と同様に生徒が一人一人手書きの案を出し、全34点の案を基に話し合いを行い、味のイメージに合わせて、「ハート」や「風船」などのイラストをデザインした3点を最終案とし

た。

オ プレゼンテーションの作成

検討した3項目の最終案をスライドにまとめ、プレゼンテーションの資料を作成した。スライド作成の基本構成は教員が行い、スライドも発表原稿も 細かな修正は生徒が役割を決めて責任をもって資料を次のとおり作成した。



プレゼンテーション画面①



プレゼンテーション画面②

③ 北海道八雲高等学校との共同開発

北海道八雲高等学校総合ビジネス科3年生18名の「総合実践」の授業時間に本校生徒が参加し、交流及び共同学習による商品開発を行った。

ア 第1回交流及び共同学習

本校生徒はかなり緊張していたが、交流校の3年生のきめ細かな配慮のおかげで、スムーズに話し合いが行われた。両校から開発商品について、プレゼンテーションがなされ、その後は両校合わせて4グループに分かれ、3項目について意見交換を行った。



プレゼンテーション



意見交換

イ 第2回交流及び共同学習

2回目の交流及び共同学習では、本校生徒は前回の経験を生かしてスムーズに話し合いに参加することができた。前回と同じグループで話し合いを再開し、各グループで最終案を次のとおり決定した。

1 味の組み合わせ

- 3種類 (① ホワイトにイチゴ ② ホワイトに抹茶 ③ カカオにイチゴ)
- 味の組み合わせのポイント
 - ① イチゴの酸味+ホワイトの甘味
 - ② 抹茶の渋み+ホワイトの甘味
 - ③ 子供も食べやすい。見た目によい。
- 味付けの基本
 - ★ホワイトを基準として2種類用意する。カカオはビター、抹茶は渋めがよい。
 - ★若い女性が好む (F1: 女性20-34、F2: 女性35-49)。

2 商品名

- 2種類 (①チョコっとひといき ②チョコっとひといきクッキー)
- 商フェアの顧客は年配の方が多く、子供もいるため、シンプルが良い。
- イタリア語やドイツ語の「ショコラーデ・ビスコット」もあったが、分かりづらい。
- 「クッキー」を入れると分かりやすいと思うが、意見が分かれた。

3 デザイン

- 2種類 (①縦型 商品名のみ ②四隅にハート)
- 背景を透明にして商品が見えるようにした。
- クッキーの4種類の色が入っている。
- ハートがモチーフになっている(クッキーのデザインより)

④ ワークショップいまかねへのプレゼンテーション

ア プレゼンテーションの作成

北海道八雲高等学校でのプレゼンテーションの作成と同様に基本形を教師が作り、生徒がパソコンを操作してスライドの細部を作成した。前回よりも生徒たちだけで行える範囲が広くなり、スライドの細かな部分にも気をつけて作成することができるようになってきた。

イ ワークショップいまかねでの提案

6月末に本校生徒8名が、ワークショップいまかねを訪問して、最終案を提案した。

1 商品開発の軸(コンセプト)

開発商品のターゲット

今金の学校祭はF2
女性 35歳~49歳

商業教育フェアはF1
女性 20歳~34歳
昨年は、F3、M3が多かった 男女 50歳以上

プレゼンテーション画面①

2 商品の味

 ホワイトにイチゴ	 ホワイトに抹茶	 カカオにイチゴ
・イチゴの酸味にホワイトの甘み	・抹茶の渋みにホワイトの甘み	・子供も食べやすく、見た目が良い

プレゼンテーション画面②

戸室孝俊施設長からは、「味の細かな点にも提案していただいたので、製造しやすい。」「分かりやすい発表でした。」と賞賛された。



ワークショップいまかねへのプレゼンテーション



試作パッケージ



試作品

(2) 新しいショコラクッキー「チョコっと ひといき。」開発の成果と課題

① 成果

- 生徒は商品開発のアイデアを考えることの難しさを感じた一方で、商品開発の楽しさややりがいを感じるようになり、商品開発の意欲が高まった。
- 生徒は話し合いをしているうちに、意見がまとまらず、笑顔がなくなってしまう場面もみられたが、そのことを受け止めて、「気をつけたい。」など、前向きに取り組むことができるようになった。
- 高校生との交流及び共同学習において、話し合って案をまとめることにより、コミュニケーション力や意欲の向上が図られた。
- 福祉施設職員への提案を通じて、未経験の場でもプレゼンテーションやコミュニケーションを図ることができた。

② 課題

- 今後は、販売を含めた生産管理や次年度の発注計画を考えるなど商品開発の学習を継続して行うことが課題となった。
- 販売場所については、より多くの人に商品を知っていただくために、商フェアや学校祭以外の販売場所で販売を計画することが課題となった。そこで、町内のホテルでの販売を模索して、平成29年12月から今金町内のホテルで各部屋の茶菓として提供される他、ホテルの売店でも販売されている。また、社会福祉法人光の里が運営するアンテナショップでも販売されているが、販売先の拡充が課題となっている。
- 北海道八雲高等学校は、八雲町の「スイーツフェア」に出品してほしいと依頼を受けており、本校は「今金町ふるさと納税の返礼品」に加える方向で検討を進めている。

(家庭総合科主任 小林和幸)

実践事例 4

地域学校協働活動としての受注作業（委託）

1 地域学校協働活動としての受注作業の主旨

通常の学級に在籍する発達障がいのある生徒が中学校時代に不登校となり、本校に入学してくる事例が増えてきている。このような生徒は口頭言語能力や知識に比べて社会性の発達に遅れがあるため、障がい認識が進まず自分自身の自己像と実際の働く力とはギャップがあり、現場実習そのものに高いハードルを感じ、精神的につまずきやすい傾向がある。

そこで、生徒がほめられたり感謝されたりする機会を増やし、生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようにするためには、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会として、校外での作業や現場実習を積極的かつ計画的に設定する必要がある。校外で行う受注作業（地域との協働活動）は、地域の関係機関の業務を補助する活動であり、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることで、関係機関の職員や町民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めるとともに、生徒がより一層地域に溶け込むことにつながる教育効果の高い教育活動である。同時に、関係機関の職員や町民は、障がいのある生徒との接し方を活動を通して自然に学ぶことが可能となるのみではなく、生徒が地域コミュニティを支える存在となることにより、卒業生が地域に溶け込んで町民との交流を楽しみながら就労する「共生社会の実現」に資することができると考えられる。

今金町では、「今金町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン及び総合戦略」（27年度～31年度）の基本戦略の第一位に「障がい者が地域産業の担い手としての活躍の場づくり」を挙げており、地域との協働活動は「共生社会の実現」を目指す国や道、町の施策とも合致する。

そして、新学習指導要領では、地域の公共システムにおけるコミュニティの拠点として、よりよい教育でよりよい社会を作ることと地域と共有する「社会に開かれた教育課程」であることが求められる。

地域の関係機関の業務補助を行うことは、生徒の社会経験の拡充と実践的な働く力の獲得に資するばかりではなく、地域コミュニティの拠点としてよりよい教育を地域と共に作り、よりよい社会を作ることにつながる。

2 町内会配布物仕分け作業、公共施設等の環境整備（平成28年度）

今金町役場が行う町内会配布物の仕分け作業、公共施設の環境整備に取り組んだ。

(1) 町内会配布物仕分け作業

① 町内会配布物仕分け作業の工夫

今金町役場からの受注作業として、町内会配布物の仕分け作業を2学期から、毎月2回（第1、第3木曜日）程度実施している。各学科から、4、5名単位で学科の作業学習とのバランスを考えながら、輪番で仕分け作業に参加している。町内会の班ごとに配布物を戸数分だけ仕分ける作業は、間違いはやり直しにつながるため、正確な枚数の確認と仕分けた結果の点検が必要になる。

役場職員とのふれあいや関わり合いを重視して、コミュニケーションを相互に取る場面を設けるとともに、作業の手早さや正確性の確保のために、役場職員と本校生徒がペアを組み、役場職員とのコミュニケーションを図りながら、手早さに加え、正確に枚数を数えて仕分けすることができるように工夫している。



役場職員との回覧物仕分け作業

② 町内会配布物仕分け作業の成果と課題

ア 成果

- 手早さと正確さが求められる作業のため、生徒は社会で働くイメージを持ちやすい活動となっている。
- 生徒の感想は、「はじめは緊張しました。班ごとに分ける枚数が違うので間違わないように集中力が必要です。役場の方と話しながら作業しなければいけない場面もたくさんあり戸惑って手が止まってしまうことがあった。」「枚数を数えるのに時間がかかってしまった。」「時間があつという間にたっていた。またやってみたです。」などの反省や意欲の向上を示す内容であった。
- 学科の作業学習では、手早く正確にできる生徒も、仕分け作業となると、正確に枚数を数えて記憶する能力が求められ、作業が進まないことがあり、生徒の新たな課題の発見と生徒による主体的な努力へのきっかけ作りになった。
- 役場職員から、直接に感謝の言葉やお礼の言葉をいただくことにより、生徒の自己有能感が向上し、仕分け作業で明らかとなった自分の課題について、校内の作業学習でさらに取り組むようになるとともに、社会に出て働くことへの意欲の向上につながった。
- 平成27年度までは、町内会長が町内会配布物の仕分けを行っており、28年度から役場が担当することになり、業務量が増大したことから、本校生徒の仕分け作業への参加によって、作業量と作業時間が軽減され、双方にとって利点のある活動となった。

イ 課題

- 3学科共通の作業として実施をしているが、回数に限りがあり、新たな「流通・サービス」関係の作業の切り出しが課題となった。
- 学科の作業学習とのバランスを取りながら実施するため、全ての生徒が同程度に経験することは難しいということが課題となった。

(2) 町内公共施設等の環境整備

① 町内公共施設等の環境整備の工夫

今金町内の公共施設等（町民センター、総合体育館、健民グラウンド、今金八幡宮等）の清掃活動に9月に3日間の日程で2学年作業強化日の作業として取り組んだ。

実施に当たっては、日頃利用することの多い施設を中心に、町民の目に触れて交流が広がることが期待される施設を選ぶとともに、清掃会社の清掃マニュアルに基づいて、事前に校内で環境整備の方法を学習し練習した後、公共施設での環境整備を行うようにしている。また、施設を管理する今金町教育委員会と連携を図りながら、日程調整や作業内容を調整して実施している。



町民センターの環境整備



今金八幡宮の環境整備

② 町内公共施設等の環境整備の成果と課題

ア 成果

- ・日頃から支援をいただいている今金町役場が所管する施設の環境整備を行うことにより、生徒は社会貢献活動の喜びを味わうとともに、施設を使用する人に喜んでもらえるように作業することの楽しさを感じることができた。
- ・役場職員や管理者から、直接に感謝の言葉やお礼の言葉をいただくことにより、生徒の自己有能感が向上した。

イ 課題

- ・学科作業がものづくり作業のため、学科作業とのバランスをとって実施することが課題となった。
- ・環境整備の方法について、専門業者から指導を受けて、より質の高い環境整備を行うことが課題となった。



健民グラウンドの除草作業



除草後のグラウンド

3 今金町総合福祉施設での車いす清掃、レクリエーション補助作業、公共施設の環境整備等（平成29年度）

町内会配布物仕分け作業を継続するほか、公共施設の環境整備を2学期から毎月1回実施している。そして、今年度からは総合福祉施設での車いす清掃を開始し、レクの補助についても9月末から取り組んでいる。また、町内の認定こども園で雪遊びの迷路づくりや今金小学校の花壇の環境整備などを不定期で行っている。

(1) 今金町総合福祉施設での車いす清掃

① 総合福祉施設での車いす清掃の工夫

今年度5月から毎月1回（水曜日午後）に1学年の各学科から4～8名が、輪番で実施している。施設には車いすが40台以上あり、これまでは施設職員が毎週水曜日に10台前後ずつ車いす清掃を実施し、全ての車いすを1ヶ月に1回前後清掃するようにしていた。ほこりや食べこぼしなどが付着していることが多く、1台の清掃に30分近くかかることもあり、人手が必要な業務となっていた。

実施に当たっては、福祉施設職員から清掃のポイントとして、車いすの操作の仕方や汚れやすい部分、安全で手早く丁寧に清掃することなどについて説明を受け、生徒は作業のポイントを意識して丁寧に清掃することを心がけて作業を行っている。車いす清掃を行う時間は、1回90分であり、一人3、4台の車いすを清掃する。生徒による車いす清掃により、福祉施設職員が毎月4回清掃する業務が2回に減った。



車いす清掃

② 総合福祉施設での車いす清掃の成果と課題

ア 成果

- 何度か経験している生徒は、初めて取り組む生徒に自分の意識していることやどのように作業を進めれば良いかなどを伝える場面が見られた。
- きれいになった車いすに乗ってもらいたいと、はりきって作業する様子が見られた。
- 清掃作業中に声をかけられたときに、コミュニケーションすることができるようになった。
- 利用者さんから、「きれいになったよ。ありがとう。」と言われて「すごく嬉しかった。」などの感想を持ち、自己有能感の向上につながった。
- 働いて人に喜ばれる楽しさを実感し、校内作業への意欲が高まった。
- 生徒からは、「今日は何台も掃除することができませんでした。次はもっと掃除する台数を増やしたい。」という意欲に溢れた感想があった。
- 生徒による車いす清掃が、福祉施設職員の業務の効果的な補助活動となった。

イ 課題

- 学科作業がものづくり作業のため、学科作業とのバランスをとって実施することが課題となりました。
- 学科の作業学習とのバランスを取りながら実施するため、全ての生徒が同程度に経験することが難しいことが課題となりました。

(2) 総合福祉施設での高齢者デイ・サービス利用者のレクリエーション補助作業

① 総合福祉施設でのレクリエーション補助作業

福祉関係の職業に興味・関心がある生徒を対象に、今金町社会福祉協議会が行っている高齢者デイ・サービス活動のレクリエーション補助作業に、2学期9月末から毎月1回程度参加している。レクリエーションは、的当てなどの簡単な内容であるが、用具の準備や得点表の記載、利用者さんの移動補助などを行っている。

② 総合福祉施設でのレクリエーション補助作業の成果と課題

ア 成果

- 利用者との関わりを通して、普段の生活でも話す速度や相手への伝え方などを意識するようになり、相手が聞きやすい速さや相手の話をよく聞いて話題を広げるなどの会話の仕方が身についてきた。
- 福祉施設職員のレクリエーション活動の補助をする際、事前・事後の打ち合わせや活動中のコミュニケーションを通して、自分が将来福祉施設で働くことを具体的にイメージして、自分にはどのような力を身に付ける必要があるかを考えることが増えてきており、学校生活でもできることを増やそうと努力するようになった。



レクリエーション補助作業

イ 課題

- 1対1の会話が多く、生徒は聞き役に回ることが多い状況にある。相手の話を聞くときのあいづちの打ち方や返答の仕方などのコミュニケーションスキルを一層指導する必要がある。
- 仕事で人と関わるときに、どこまで自分のプライバシーを伝えてよいかという公私の区別を理解することがまだ難しい。公的な場面で話すことが可能な内容と話してはいけない内容の区別を具体的に指導する必要がある。
- 利用者の状況をよく観察して動く必要がある仕事のため、高齢者の立場に立った介助や接し方などや介助に必要な体力を付ける必要がある。
- 命を預かる仕事でもあるので、参加生徒が介護関係の職業に希望する場合には、在学中に介護の基礎となる部分の知識を学ぶ場の確保を検討する必要がある。

(3) 町内公共施設の環境整備

① 町内公共施設の環境整備

学校のワックスがけなどを行っていただいているメンテナンス会社から講師を派遣していただき、屋内体育館で床の清掃作業の仕方や留意する点などについて、平成29年11月に学年ごとのグループに学習を深めた。生徒たちは、専門的な清掃方法が日頃行っている校内清掃とは異なることに驚き、意欲的に練習に取り組んでいた。

② 町内公共施設の環境整備の成果と課題

ア 成果

- 外部講師から学んだ清掃作業を校外の公共施設で実践することができ、自信を深めるとともに、日頃からご支援いただいている今金町の公共施設の美化活動に貢献することができた。
- 外部の方から簡単に指示を出され、確実な仕事をするためにどのように進めるか、時間内に終わらせるための時間配分など、指示の後には自分たちで考えて仕事を進めなければいけないという会社に近い形態での経験をすることができた。
- 普段清掃している場所とは異なる場所で、しかも異なる方法で清掃を行うということは、日常の掃除の流れとは異なるため、何をすべきか考えたり、より良い方法を見つけて工夫したりしながら仕事をする経験を行うことができた。
- 報告・連絡・相談など、普段やって取り組んできた場に応じたコミュニケーションを校外の公共施設での清掃作業の場面で、卒後の就労をイメージして活用することができた。
- 共生社会を実現していくための足がかりとして、地域の方々に生徒の活動を知っていただく機会となった。



総合体育館の環境整備

イ 課題

- 単に環境整備だけを特設しても、“単に掃除をする”だけになってしまうばかりか、「できた。」という間違った自己評価しかできない環境になってしまう可能性が高くなる。
- 外部の方からは好意的な評価をいただくことが多く、指導者側が普段の作業学習からどのような分担でどのようなことに留意して作業を進めるのかについて協同的な課題解決の方法を生徒に丁寧に指導し、生徒が自己の課題を意識して主体的に取り組み、社会の「現場」での作業を通して課題解決することができるように、参加する生徒の絞り込みと事後の振り返りを丁寧に行う必要がある。

(教務主任 金子 巨喜)

〔模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 営業部長〕